福岡教育大学大学院教職実践専攻年報　第12号　101-108（2022）

［研究論文］

学級会デジタルコンテンツを活用した教員研修の一方途
－学級会セルフチェックシートの開発を通して－

One-way training for teachers utilizing Class meeting digital contents
- Through the development of Class meeting self-check sheet –

野　中　大　輔
Daisuke NONAKA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻
生徒指導・教育相談リーダーコース/
筑後市立西牟田小学校

脇　田　哲　郎
Tetsurou WAKITA

福岡教育大学教職実践ユニット

（2022 年 1 月 31 日受理）

本研究は、学級担任の学級活動(1)に関する実践的指導力向上に寄与する教員研修の在り方を究明することを目指し、学級会デジタルコンテンツを活用した教員研修を実施し、効果を検証した。研究では、実践的指導力を自己評価する質問紙として学級会セルフチェックシートを開発した。その開発過程では、質問紙のデジタル化や探索的因子分析を実施し、教員研修において学級会デジタルコンテンツがより効果的に活用できるようにした。公立小学校２校で教員研修を実施した結果、参加者の研修満足度が高く、学級会デジタルコンテンツについても好意的な意見が多く見られた。また、教員研修後に約半年のコンテンツ視聴期間を設けたのち、再度実施した実践的指導力の調査では「自治性マネジメント」因子が有意に向上していた。このことから、本研究で実施した教員研修の効果が示唆されたものと考察した。

キーワード：学級会，学級活動(1)，　特別活動，教員研修，実践的指導力，デジタルコンテンツ

1　問題と目的

(1) 主題設定の理由

中村・重松（2015）が「山積する教育問題の一つである生徒指導上の諸問題について，不登校といじめ問題を解決していくためには，新たな問題を生まないこと，そのためには，児童生徒相互のよりよい人間関係が重要であり，『望ましい集団活動』を特質とする特別活動の機能を発揮させることが，発達促進的・開発志向のアプローチである」と指摘するように，特別活動の機能を発揮できるよう教師が適切に支援することは，児童生徒が安心して学校生活を送れるようにするために極めて重要である。

しかし，令和元年度３月以降の新型コロナウイルスの感染拡大は，学校教育を大きく様変わりさせた。全国一斉の長期休校措置，分散登校，三密回避，新しい生活様式への対応などに追われ多忙を極めた学校現場は記憶に新しい。そんな中，特別活動の実践に目を向けると，運動会や修学旅行などの学校行事の中止や規模縮小，児童会活動やクラブ活動の時数カット，学級活動における制限等，多くの学校で従来通りの実践ができなくなった状況がみられた。特に，特別活動の中心的内容とされる学級活動(1)「学級や学校における生活づくりへの参画」の特質である児童の「自発的，自治的な活動」の実践については，教師が敬遠してしまいがちだったという現状も見受けられた。

一方，学級活動の実態について，桑原(1999)は，「学級活動の特質や意義を踏まえた展開がなされている学校は少ない。その理由の最たるものは，学級活動が行事のための学級活動になっているという現実である。このことに時間を奪われているため

に本来の学級活動に取り組めないという実態がある。特に自発的，自治的な活動が削除されてしまう傾向にある」と述べている。美谷島(1993)は，学級活動の現状について「表面的，量的な時間数が確保されていたとしても内容面の重視が不十分である」と指摘している。つまり，学習指導要領に基づき年間 35 時間以上の時間数は教育課程上保証されているが，活動の内容面を重視した時間数が保証されておらず，学級活動が学校行事の事前・事後活動，学級の生徒の指導(主に問題行動の防止に関わる教師主体の説諭等)などに重宝に活用され，本来あるべき学級活動の内容の時間が確保されていない面が見られることを問題視している。

すなわち，教師が学級活動(1)の特質である児童の自発的，自治的な活動を敬遠しがちだという問題は，何も新型コロナウイルス感染拡大によって引き起こされた問題ではなく，それ以前から存在した問題であり，新型コロナウイルス感染拡大防止という名目の下，学級活動(1)に対する教師の消極的な姿勢に拍車がかかったことによって，問題がより深刻化，顕著化したものだと考えられる。

こうした学級活動(1)の指導の問題について，桑原（1999）は，その根本的な問題に，教師の学級活動の重要性の認識不足等があるとしている。また，「多忙を理由に特別活動の教育意義を理解していても実践しようとしない教師が多いのも現実である。特に，自発的，自治的な活動や話し合い活動に対する認識が浅い」と指摘している。さらに，山西(2015)は，教師の指導に対する意欲や熱意が乏しいこと，多忙を理由に効果的な実践を行おうとしていないことを挙げている。つまり，本来あるべき学級活動(1)の内容である児童の自発的，自治的な活動が積極的に実践されていない背景には，教師の学級活動(1)への実践意欲が低いことが大きく関与していることを示唆している。

では，学級活動(1)に関する実践意欲を高めるにはどうすればよいのか。山西(2015)は，「特別活動の教育効果を教師に伝え，児童生徒の変化を理解させることで改善される。さらに実践的な指導法を伝えることで，指導の要点が理解でき特別活動の授業展開が認識され，明確な指導法が構築され授業への意欲も向上する」と教育効果と実践的な指導法を伝達することの重要性を指摘する。ここで，児童生徒の変化が教育効果として顕在化してくるまでには，長期的視野に立つことが必要であろう。そう考えると，教師の今日的課題は，学級活動(1)に関する実践的な指導力を向上させることにある。

学級活動(1)に関する実践的な指導力について，中村(2016)は，フィールド調査の結果について「若手教員のみならず中堅教員も『学級会』の実践知を持たない実態が捉えられた」と指摘している。さらに，実践知を持たない教員からは，「やり方がまず分からない，安心して取り組める議題がよく分からない，実践知のなさによる不安感，自分の中では重きを置いていなかった，他の教科と比べて軽視している，時間がない，周囲で実践している教員を見かけない，学級会の研究が少ない」等の語りが抽出されたと報告している。このことは，幅広い教職経験年数の教員が学級活動(1)の実践的な指導力に課題を抱えており，その要因として先述した「教育的意義に対する認識不足」に加え，「やり方がまず分からない」等の語りが象徴するように「指導方法に対する理解不足」があることを示唆するものであると考える。経験年数の違いを鑑みれば，そもそも若年教員の実践知が少ないことは致し方ないことかもしれないが，若年教員が学級活動(1)の教育的意義を見出せないままで，指導方法を向上させていこうとしなければ，指導方法に対する理解が不足した中堅教員，ベテラン教員が増加していくことになる。さらに，中村(2016)は，若年化する学校現場の現況を鑑みて，「学級会の実践知を持たない若手教員の急増は，今後益々，学級会の衰退現象に拍車をかける」と危機感を顕にしている。

また，第二著者が学級活動(1)の実践知を有する教員を対象に実施したインタビュー調査(2020)によると，「学級活動(1)について学ぶようになったきっかけは何か」「どのようにして学級活動(1)の実践知を獲得してきたか」という質問に対する回答を整理すると「学級活動の実践に熱心で魅力的な教員との出会いがあった」「学級活動の研究に携わってきた」という趣旨のものが多いことが明らかになったとしている。この結果は，先述した実践知を持たない教員の語りにある「周囲で実践している教員を見かけない」「学級会の研究が少ない」というものと相反するものであり，学級活動(1)に関する実践的指導力の獲得には，「身近な教員の存在」や「研究への関与」が影響していることを示唆するものであると考える。身近に学級活動の実践に熱心で魅力的な教員と出会えるかについては偶発的なものであり，誰しもに必ず訪れる出会いではないと言える。実践知を持たない教員が急増していけば，出会いの確率は限りなく少なくなってしまうだろう。一方，「研究への関与」については，校内研修や研究会，学会，自主サークルなど多様な教員研修の機会がある。ゆえに，学級活動(1)に関する実践的な指導力の向上に寄与する「教員研修」への期待は大きい。

教員研修もまた，新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け，急速な転換期を迎えている。従来型の対面実施のみだけでなく，ウェブ会議システムを利用したオンラインでの実施も数多く実施されるようになるなど，デジタルディバイスを活用した新しい教員研修の在り方が模索されている最中であり，まだまだ確立されていない。そこで，デジタルディバスのメリットを活かした教員研修の一方途について提案し，その効果を検証することを通して，学級活動(1)の実践的な指導力向上に寄与したいと考え，本研究主題を設定した。

(2) 主題の意味

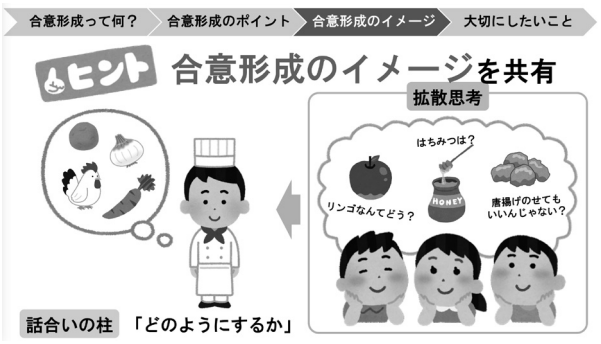
主題の「学級会デジタルコンテンツ(以下，コンテンツ)」とは，「小学校教員の学級会の指導法に関する学びを支援するツール」(2020)のことである。制作に当たっては，「いつでも，どこでも，必要なときに学級活動(1)の指導方法を学べるものをつくる」ことをコンセプトとしながら，第二著者が，福岡県内の学級活動(1)に関する実践知を有する現職小学校教員 10 名から成る制作委員会を組織し，第一著者も委員として制作に携わった。コンテンツは，学級活動(1)の基本的な活動過程(事前の活動，計画委員会，学級会，実践から振り返り)に沿って，実践的な指導方法を解説した全 14 本の動画である。各動画のテーマは表１の通り設定した。

表１　コンテンツの各動画のテーマ

学級活動(1)の基本的活動過程	整理番号	動画のテーマ
事前の活動	A-1	学級会オリエンテーション
	A-2	学級会グッズ等
	A-3	議題の集め方や選定等
	A-4	問題意識の高め方
計画委員会	B-1	計画委員会の組織
	B-2	計画委員会の仕事内容
	B-3	計画委員会への指導
	B-4	計画委員会の時間確保
学級会	C-1	助言のタイミングや内容
	C-2	先生の話の観点
	C-3	合意形成
	C-4	集団活動の段階的指導
実践から振り返り	D-1	実践につなげる大切さと工夫
	D-2	振り返り

動画は，Power Point で作成した図１に示す２つの例のようなスライドデータに音声を録音したものである。スライドと録音原稿については，製作委員会で協議を行いながら完成させていった。完成した動画については YouTube に公開することで，スマートフォンやタブレット等からでも気軽にコンテンツへアクセスできるようにした。実際のコンテンツへのリンク先 URL と QR コードは次頁の表２の通りである。

C-3　合意形成



「どのようにするか」という話合いではどうでしょうか。

例えば，カレーの具材はどうするか…と考えるときを想像してみましょう。この場合は，一つに決めるのではなく，アイデアを出し合いながら具材をどんどん決めていきますね。

ただ，なんでもいいというわけではありません。当然，みんなが納得できる具材でなければなりません。「チョコレートを入れたい」という意見が出たら，ちょっと立ち止まって，理由を聞いたり，他の具材との組み合わせを考えたりしながら，じっくり話し合うことも必要です。「みんながおいしいと思えるカレーをつくる」という目的に合っているのか振り返ることも大切ですね。

この場面を，「ドッチボール」のルール」をどうするかに置き換えて考えてイメージしてみてください。

C-4　集団活動の段階的指導

はじめに，「これまでにその学級がどれだけ，自発的・自治的活動を経験してきたか」は，集団の成長に大きく関わります。

一般的に「自発的・自治的活動の経験値」と「学級集団の成長」は比例関係にあると言えるでしょう。どれだけ学級会などを実践してきたかは，これまでの担任の先生や学校全体としての考え方も大きく関わります。

図１　コンテンツに収録したスライドと録音原稿の例(C-3，C-4)

表２　コンテンツへのリンク先 URL と QR コード

活動過程	整理番号	URL	QR コード	活動過程	整理番号	URL	QR コード
事前の活動	A-1	https://youtu.be/nxd_muMD7SQ		学級会	C-1	https://youtu.be/7G0lC9XAgvM	
	A-2	https://youtu.be/9qpCgxGYc4w			C-2	https://youtu.be/2eQBjr4eRiI	
	A-3	https://youtu.be/1TsT7GyrX2E https://youtu.be/fguNVj2yQOU			C-3	https://youtu.be/WOP-jslnU_o	
	A-4	https://youtu.be/MsQ6OKOK5m8			C-4	https://youtu.be/ubHG4ya57y4	
計画委員会	B-1	https://youtu.be/mazpH2XsCrQ		実践から振り返り	D-1	https://youtu.be/NsjDNj2ZmZs	
	B-2	https://youtu.be/uire1ScaF58			D-2	https://youtu.be/ep_6KG_k_sw	
	B-3	https://youtu.be/3v7XypOkltg					
	B-4	https://youtu.be/eU_5JDFxiU8					

「学級会デジタルコンテンツを活用した教員研修」とは，校内研修や研究会，自主サークルなどの場において，コンテンツを活用した教員研修を実施することである。これは，本来，スマートフォンやタブレット等から個人で利用することを想定して制作されたコンテンツであるが，教員研修において研究主任や特活主任，指導助言者などが教員集団を対象としてコンテンツを活用する効果の検証を試みたものである。本研究では，小学校教諭である第一筆者が在籍校や他校の校内研修，自主サークルにおいてコンテンツを活用した教員研修を実施し，研修参加者の反応について質問紙調査やインタビュー調査を行った。具体的には，次頁の研修計画(表３)を立案した上で教員研修を実施した。

研修計画の立案については，特にコンテンツの在り方として，コンテンツで紹介する指導方法はあくまでも一例であって，それが絶対的な指導方法ではないことを強調することに留意した。これは，指導方法の形骸化を防ぐためである。コンテンツを活用して教員研修を実施する場合，担当者は，研修の参加者に対して，批判的な思考をはたらかせながら動画を視聴したり，紹介した動画を基に児童の実態に合った指導方法を創造的に協議したりできるように支援するべきである。

副主題の「学級会セルフチェックシート(以下，チェックシート)」とは，「学級活動(1)に関する実践的な指導方法について，自己評価することのできるツール」である。次頁の表３でいう２-(1)に該当するもので，学級会デジタルコンテンツを活用した教員研修の核となるツールである。チェックシートの開発過程や実際の教員研修での活用については次章で述べる。

２　研究

(1) 学級会セルフチェックシートの開発

①目的

学級活動(1)に関する実践的な指導方法について自己評価できるツールを開発すること。

②期間　2020 年４月～2021 年３月

表３　教員研修実施計画案

計時	研修参加者の活動	指導・助言者の留意点
0	１　研修会の目的を確認する。 ・自発的，自治的な活動の教育的意義を理解する ・実践的指導力を向上させよう	◯学級活動(1)を通した自発的，自治的な活動の促進は，学級経営の基盤や児童の学校適応の支えになることを伝える。
10	２　学級会デジタルコンテンツを利用し，実践的な指導方法の例について知る。 (1)「学級会セルフチェックシート」(Google Forms）を利用して，自身の実践的指導力を自己評価する。 ・事前の活動，計画委員会，学級会，実践から振り返りについての全 20 の質問に５件法で回答する	◯Google Forms のリアルタイム集計機能を活用して，参加者の実態(全体的傾向)を把握し，全体で視聴する動画を選択する。
20	(2)研修参加者の実態(全体的傾向)について共有し，課題に合った学級会デジタルコンテンツの動画を選択して視聴する。	◯指導方法の形骸化を防ぐため視聴前に動画はあくまで一例であることを伝える。
35	(3)学級会デジタルコンテンツの動画視聴を通して，疑問に思ったこと，これからの実践に生かしていけそうなこと等についてグループで協議し，全体で共有する。	◯グループ協議では，ファシリテーターを中心に，動画をもとに批判的思考と創造的思考を促し，具体的な指導方法について協議できるようにする。
45 50	３　今回の研修会を振り返り，アンケートに回答するとともに次回の研修会までの展望をもつ。 例）学級会の指導で活用し，その結果を共有し合おう等	◯今後の自己研鑽に向けた学級会デジタルコンテンツの主体的な活用を促す。

③実施内容(チェックシート完成までの経緯)

ア　質問項目の検討

質問項目を検討するにあたって，まず，第一執筆者が中心となって試案を作成した。試案は，学級活動(1)を実践的に指導する上で教師に必要と考えられる力があるかを問う全 20 の質問項目の５件法(よく当てはまる，当てはまる，少し当てはまる，あまり当てはまらない，全く当てはまらない)で構成した。質問項目は，学級活動(1)の基本的な活動過程を「事前の活動」「計画委員会」「学級会」「実践から振り返り」の４つに分け，それぞれ５つずつの質問項目を作成した。

その後，第一執筆者が作成した試案をもとに，第二執筆者を中心とするコンテンツ制作委員で質問項目を検討した。質問は「あなたは～できる」と自身の実践的指導力の自己評価を促す項目と，「子どもたちは～できる」と学級の児童の活動について評価を促す項目を作成した。後者の質問項目は，教師の実践的な指導の結果，児童に自発的，自治的な活動を行う力が身についたかを測定するといった意図から作成したものであったが，教師の実践的指導力を測定するという目的に削ぐはないことから，除外した。

さらに，試案は福岡県内外の研修会や自主サークル等において複数回の試行を行い，質問項目の見直し・修正を経て決定した。

それと同時に，チェックシートの質問項目に合わせる形でコンテンツ動画を作成していくことが決定し，コンテンツの制作活動も始まった。

イ　デジタル版の開発と試行

動画コンテンツの完成と YouTube 上での公開決定を受けて，それまで紙面形式だったチェックシートをデジタル化した。開発には Google Forms を利用し，スマートフォンやタブレット等から気軽に実践的指導力の自己評価ができるようにした。実際のデジタル版チェックシートには表４に示した URL や QR コードからアクセスできる。さらに，Google Forms のテスト機能を活用することによって，チェックシートとコンテンツを連動させた(表５)。具体的には，チェックシートで低評価だった項目について，実践的な指導法を学ぶことのできるおすすめ動画としてコンテンツへのリンク先が表示されるようにした。

表４　チェックシートへのリンク先

URL	QR コード
https://forms.gle/ejcE3YJ5hpTGznUQ7	

表５　チェックシートと連動したコンテンツ内容

	学級会セルフチェックシートの質問項目	コンテンツの内容
事前の活動	学級会について子供たちに説明できる(学級会オリエンテーションを実践できる)	学級会オリエンテーション
	学級会グッズやノート，教室掲示など学級会に必要なものを準備できる	学級会グッズ等
	学級会の「議題」について，その集め方や選定の仕方を理解して実践できる	議題の集め方や選定等
	子供の問題意識を高めるための支援を実践できる	議題の集め方や選定等
計画委員会	輪番制の計画委員会を組織できる	計画委員会の組織
	計画委員会の仕事内容を理解している	計画委員会の仕事内容
	計画委員会への指導ができる	計画委員会への指導
	計画委員会が活動する時間を確保できる	計画委員会への指導
学級会	学級会での教師の助言のタイミングやその内容を理解し，実践できる	助言のタイミングや内容
	学級会の終末場面の「先生の話」の内容を理解し，実践できる	先生の話の観点
	学級会において子供たちが自分たちで合意形成できるようにするための支援を実践できる	合意形成
	集団活動の段階に合った指導を実践できる	集団活動の段階的指導
実践～振り返り	子供たちの自主的活動を促進できるような工夫ができる	実践につなげる大切さと工夫
	視点を明確にした振り返り活動を実践できる	振り返り
	振り返りをその後の実践に活かすことができるような支援を実践できる	

ウ　探索的因子分析

「学級会セルフチェックシート」20 項目のうち，児童の活動を評価する４項目を除外した 16 項目について，探索的因子分析(最尤法，プロマックス回転)を行った。因子数は，固有値の減衰パターン(9.908,1.625,0.760,･･･)，および因子の解釈の可能性を考慮して２因子とした。しかし，１項目については，２因子対して高い因子負荷量(.376 と.411)を示したため除外し，再度，因子分析を行った。回転後の因子パターンを次頁の表６に示した。第１因子は「児童の自発性を促す教師の支援」に関わる項目で負荷量が高く見られたため，「自発性促進」(Chronbach α=.944)因子と名づけた。第２因子は「児童が自治的に活動できるようにするための環境を整備する教師の支援」に関わる項目で負荷量が高く見られたため，「自治性マネジメント」(Chronbach α=.931)因子と名づけた。いずれも内的整合性指標であるα係数は十分な信頼性が確認された。因子間相関は，.702 であった。

表６　実践的指導力に関する質問項目の因子分析(N=86)

項目	Ⅰ	Ⅱ
振り返りをその後の実践に活かすことができるような支援を実践できる	**.960**	-.181
集団活動の段階に合った指導を実践できる	**.867**	-.027
学級会において子供たちが自分たちで合意形成できるようにするための支援を実践できる	**.866**	-.018
視点を明確にした振り返り活動を実践できる	**.863**	-.109
子供たちの自主的活動を促進できるような工夫ができる	**.716**	.184
子供の問題意識を高めるための支援を実践できる	**.712**	.156
学級会での教師の助言のタイミングやその内容を理解し実践できる	**.686**	.201
学級会の終末場面の「先生の話」の内容を理解し実践できる	**.506**	.388
計画委員会の仕事内容を理解している	-.179	**1.019**
計画委員会への指導ができる	-.026	**.925**
輪番制の計画委員会を組織できる	-.154	**.874**
学級会グッズやノート，教室掲示など学級会に必要なものを準備できる	.109	**.741**
学級会の「議題」について，その集め方や選定の仕方を理解して実践できる	.278	**.652**
学級会について子供たちに説明できる(学級会オリエンテーションを実践できる)	.254	**.609**
計画委員会が活動する時間を確保できる	.245	**.479**
因子寄与率(%)	34.5	30.1

以上，探索的因子分析の結果から 15 項目２因子が抽出され，因子寄与率は 64.6%となった。

このことから，コンテンツを活用した教員研修においては，抽出された「自発性促進」「自治性マネジメント」の２因子から研修参加者の実践的指導力の変容についても調査することとした。

(2) コンテンツを活用した教員研修

①目的

在籍校や協力校において，チェックシートと連動したコンテンツを活用した教員研修を実施し，その効果を検証すること。

②期間　2021 年５月～2021 年 12 月

③研究対象

在籍校(全校児童 200 名程度)の学級担任９名(教職経験１～32 年目)と，協力校(近隣公立小学校，全校児童 200 名程度)の学級担任８名(教職経験２～35 年目)

③測定尺度

在籍校においては，コンテンツを活用した教員研修前後の学級担任の実践的指導力についての変容を測定するために「学級会セルフチェックシート」を活用する。協力校においては，コンテンツを活用した教員研修の効果を測定するために，研修実施後にKirkpatrick(1959)による４段階評価モデルを参考にした「研修満足度尺度」(５件法)を実施し，平均値を算出する。

④実施内容

在籍校においては研究主任の補佐的立場から，協力校においては指導助言者として表３に示した「教員研修実施計画案」の要領で教員研修を行なった。また，在籍校においては，コンテンツの視聴や指導方法の実践をおこなうための期間を約半年間設定した後，事後のチェックシートを実施した。協力校ではコンテンツを活用した教員研修の即時的な効果を検証のため，教員研修後すぐに研究満足度尺度を実施した。

(3) 結果

ア　質問紙調査(自由記述)

教員研修を実施後，在籍校と協力校の研修参加者に自由記述の質問し調査を実施した結果，表７の記述が抽出された。

表７　自由記述の回答(( )は教職経験年数)

	主な回答
在籍校	・わからないことだらけなので，コンテンツを使って家で復習したい(1) ・学級活動は，教科書がないので不安だが，コンテンツはその助けになる(32)
協力校	・いつでも見られるコンテンツを紹介いただき，ありがたかった(28) ・ぜひ他の動画も視聴して参考にさせてもらいたい(7)

イ　研修満足度

協力校での研修実施後，質問紙「研修満足度尺度」を実施し整理した結果，次頁の表８になった。

表８　参加者による研修満足度尺度の結果(N=8)

項目	平均値
研修に参加して，どのようにお感じですか？	4.37
研修の内容は理解しやすかったですか？	4.37
講師の説明は分かりやすかったですか？	4.75
研修で学んだことは，あなたの仕事の役に立ちますか？	4.00
講師は適切な時間管理のもと，効果的に研修を運営していましたか？	4.12

Max=5,Min=1

ウ　実践的指導力の変容

在籍校の学級担任９名を対象とし，コンテンツを活用した教員研修実施前後の実践的指導力２要因に対して，対応のある t 検定を行なった結果(図２)，実施後の自治性マネジメント(M=3.90, SD=0.46)が実施前の自治性マネジメント(M=2.96, SD=1.05)より有意に高かった($t(8)$=3.03, p=.016)。また，実施後の自発性促進(M=3.34, SD=0.52)と実施前の自発性促進(M=2.86, SD=0.89)に有意差はなかった($t(8)$=1.81, p=.107)。

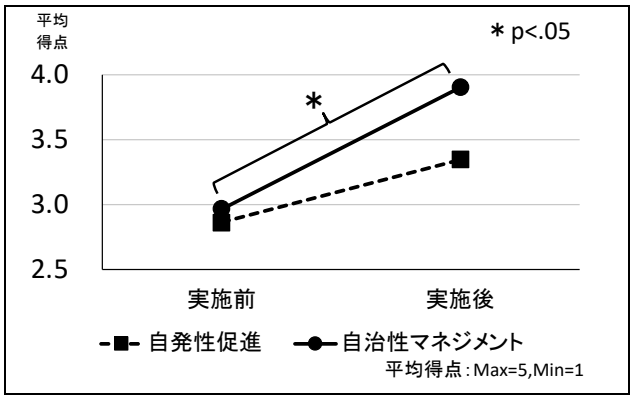


図２　t 検定の結果

３　総合考察

本研究は，学級担任の学級活動(1)の実践的指導力向上に資する教員研修を実現するため，学級会セルフチェックシートと連動した学級会デジタルコンテンツを活用した教員研修を実施し，その効果を検証したものである。研修実施後に実施した質問紙調査や研修満足度尺度の結果，研修に対する好意的な意見や研修後に学級会デジタルコンテンツを活用したい等の意見がみられるとともに，研修の満足度も比較的良好であることから，本研究で実施した教員研修が参加者にとって有意義なものになったのではないかと推察された。

また，実施した教員研修の前と，それから約半年間の期間を空けて実施した二度の「学級会セルフチェックシート」をもとにした本研究における研修参加者の実践的指導力２因子の t 検定の分析で，「自治性マネジメント」に有意な向上が認められたことから，学級活動(1)の実践を児童が自治的に実践できるように，計画委員会を組織し活動するための時間を確保したり，学級会の議題を収集し関係するグッズを準備したりするといった環境面の整備をするための方法を身につけることに本研究の教員研修が効果的であったと考えた。

このことは，研修では参加者で協働的に指導方法について学ぶことができるようにした上で，研修後においても，コンテンツを活用して指導方法を継続的に学ぶことを可能にしたコンテンツの効果であると推察した。つまり，限られた研修時間では学ぶことのできる指導方法にも制限が生まれるが，いつでも気軽に指導方法を学ぶことができるというコンテンツの特性は，研修時間を超えて学ぶことができるというメリットになったものと考えた。

一方，「自発性促進」に有意な向上が見られなかったことから，自発性を促進することは，児童の実践に対する意欲や問題意識を高めることや学級会において助言をすることなど児童に直接的にはたらきかけることが要求されるために，自治性につながる環境を整備することに比べると，短期間では身につけることが難しかったことがうかがえた。児童への直接的なはたらきかけに関しては，コンテンツを活用して指導方法を知識として獲得できたとしても，実践の中で経験を積んでいくことが重要であることが示唆された。しかし，自発性促進に関しても教員研修前よりも後の方が，着実に向上してきていることも事実であり，学級会デジタルコンテンツを活用した教員研修の一定の効果は示されたものであると考察する。

今後は，コンテンツやチェックシートの改善を行いつつ，更に効果的な教員研修の在り方について追求していく必要があるだろう。

引用・参考文献

長谷川祐介・太田佳光・白松賢・久保田真功　2013「小学校における解決的アプローチにもとづく学級活動の効果」日本特別活動学会紀要　第 21 号

中村映子　2016「学級会実践を契機とする若年教員の職能発達事例に関する研究」学校教育研究　第 31 巻　130-143 頁

中村豊・重松司郎　2015「生徒指導上の諸問題及び今日的教育課題に特別活動が果たす役割」教育学論究　第 7 号　145-155 頁

山西哲也　2015「特別活動の指導の問題」淑徳大学研究紀要　第 49 号　63-82 頁